

特別支援学級部会

<県研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案1

提案者 池田 和剛(川崎地区)

<研究主題>

相手のことを考えて自分の意見を言える子の育成 — ルールを守った話し合い活動を通して —

1 提案内容

これまでの話し合い活動は教師主導で進めてきたが、今年度は児童に司会を行わせ、学級会の流れを経験させた。自分の意見だけでなく友達の意見を聞いてまとめていく姿勢を身につけさせたり、相手のことを意識して話を聞いたり話したりできることをめざし、年間で6回の学級会を行った。

(1) テーマにせまるための手立て

①日々の活動の中での言葉かけ

日常生活の子ども同士の触れ合いの中で、相手にきつい言葉を使ったり手を出してしまったりするときは、その都度その言動について指導をしている。また、思いやりのある行動が見られたときは、積極的に褒めて相手ことを考えられる子どもの育成に繋がるようにしている。

②「聞く、話す」ための場の設定

朝の会で日直がスピーチをする。話し手は自分の思いを表現できるように、聞き手はスピーチを最後まで聞いたり、話に共感して質問や感想を言ったりすることができるように支援している。

③話を理解するための工夫、選択できるための工夫

どの子にも話し合いの内容が分かりやすくなるように、写真などを使用して何について話し合っているかを知らせるようにしている。また、選択や意思表示をする手段の一つとして、絵・写真カードなどの視覚的な手立てを取り入れ、自分の思いを表出できる工夫をしている。

④児童が安心して意欲的に取り組むための工夫

話し合いの時は椅子の配置や並び順を朝の会と同じにする。議題は児童にとって楽しい事と連携させる。司会者には台本を用意して事前に打ち合わせをする。学級会の流れを毎回同じパターンで繰り返す。

(2) 授業実践を通して

①事前の活動

- 中学校とクリスマス会を行うことを知り、意欲をもつ。
- 議題を聞き、楽しいクリスマス会にするためにゲームとプレゼントを考える。
- 司会者は話し合いの流れについて確認し練習する。

②本時の活動

- 児童が司会と記録を行い、他の児童は自分の希望するゲームやプレゼントのカードをホワイトボードに貼り、自分の意見を発表（意思表示）する。
- 出された意見を見て、やりたいものところに自分の顔写真を貼り、一人2票ずつ投票する。
- 話し合いで決まったことを決定ボードに貼り換えて、確認する。
- 友達の良かった所、自分の話し合いへの姿勢について振り返る。

③事後の活動

- 飾り付けと歌の具体的な内容や係り分担を決める。
- クリスマス会を行い、取り組みについて振り返りをする。

(3) 振り返り

①成果

- 話し合いマニュアルを作り、事前に打ち合わせをすることで児童の不安も解消し自信を持って取り組めるようになってきた。
- 低学年の児童が高学年の姿を見て、司会や記録をしたいという意欲が持ててきた。
- 視覚的な工夫は、児童が意思表示をするための支援になった。
- 自分たちで決めた内容であったことから、ほとんどの児童が楽しく活動できたと振り返りをする事ができた。

②課題

- 言葉をうまく表出できない児童への支援方法や、アンケート・振り返りのさせ方などにも目を向けていく必要がある。
- 時間的に長引かないよう、プログラムの進行時間の打ち合わせをする。
- 一人一人が自分の意思表示をし、意欲的に参加できるような話し合いを考慮する。

2 協議内容

「話し合い活動を成立させるための指導上の手立ての工夫」を協議の柱とし、5グループに分かれて活発な協議が行われた。

①テーマ設定

話題がわかりやすく、身近なことで、子どもたちにとって楽しいものがテーマとなっている。全員が取り組めるテーマかどうか重要である。

②安心して参加できる工夫

司会のやり方や話し合いの流れをパターン化し、繰り返すことでその積み重ねが安心感につながる。マニュアルがあれば、どの子どもでも司会をしやすくなる。また、座席を変えないなどの場の設定も、児童が落ち着いて参加できる手立てである。

③視覚的な工夫

顔写真やゲームの写真など、視覚的な工夫がされていた。多数決をとるためのボードは、多面的に活用できる。また、後で見分けるように板書も工夫されていた。

④個々の児童への手立て

児童が自分でやりたいことを選択し、それを実現できるということは、児童にとって十分話し合いをする意義がある。そのために実態が様々な子どもたちが同じように話し合いに参加できる工夫が数多く見られた。やはり個々の児童に合わせた教師の指導が大切である。

⑤グルーピング

話し合いが成立するように小集団にすると、その中で司会などを体験させ自信をつけさせることができる。また、異学年集団なので、低・高の学年ごとに集団をつくることもできる。さらに、長いスパンで計画的に実践できるようにしていくのもよい。

⑥話し合いとしての「話す・聞く」

司会を児童に経験させることはできるが、「話し合い」となると難しい。特に、自分の意見を話すことはできても「聞く」ことは難しく、そのための手立てを考えることが大切である。

3 まとめ

今回は、支援級の中での特活（学級会）をどのように実践していくのかという提案だった。

学級会で話し合う内容については、生活のニーズに応じて生活単元学習の中に組み込んでいく。話し合いを成立させるために、話し合いの流れや司会のやり方をパターン化したり、視覚を手がかりにして理解させるような手だてを用いたりすることが大切である。そして、どの子どもでも話し合いに参加できるように、個に応じた手だてが必要となる。

また、聞いている子に伝わっているかどうかや、児童同士の意見交換できているかは難

しく、今後の課題でもある。カード等を自分で選択して意思表示をさせたり、ホワイトボードを有効に使用したりして、個々の子どもが自ら行動に移せるような言葉かけを考えることが大切である。

小学校（提案2）

提案者 高橋 真弓（足柄上・足柄下地区）

〈研究主題〉

児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた効果的な指導の工夫・改善
～人とかかわりをとおして自尊感情を育てる場づくり～

1 提案内容

自分の思いをうまく他の人に伝えることが難しく、学習や遊びの中でなかなかうまく人とかかわりが持てない児童は、周囲から注意や叱責を受けやすく、自尊感情が低くなりやすい。自信と意欲を持って学校生活を送ることができるよう、自尊感情を高め育てる取り組みを一人の児童を例にして紹介した。

(1) 具体的方策と実践による児童の変容

① 個別の教科指導

ア 興味関心のある活動を大事にした取り組み（やり遂げる経験）

集中して取り組むことができる興味関心のある学習活動を丁寧に時間をかけて取り組んだ。→根気強く最後まで取り組んだことによる完成の喜びと満足感、交流級の友達と学習する楽しさを感じることができた。

イ 集中力の持続をめざした取り組み（児童が達成可能な指導目標を設定する）

できることから始め、自信がつくまでスモールステップで行った。場所を移動し聞き手を意識させる言葉かけをすることで、音読への抵抗感をなくして段落読みへ移行、音読発表会の設定等、学習活動に変化をつけた。1時間の流れをパターン化し、見通しを持たせるとともに終わりを明確にした。→できることの積み重ね、見通しを持つことによる学習意欲の向上により、45分の学習が可能になった。

ウ 教科の基礎的・基本的な力をつける取り組み

スキル学習や朝の会のスピーチなどを位置づけて繰り返し学習した。学習課題に取り組むことが可能になったところで、ノートを使い書くことにより学習を振り返らせた。

→漢字を覚えようと集中し、家庭でもパソコンで漢字学習をするまでになった。ノートに書く学習が素直にできるようになった。

② ソーシャルスキル指導

ア ソーシャルスキル尺度と年間を通しての目標設定

対象児童のソーシャルスキル尺度から、長期目標と短期目標（前期と後期）を設定した。

イ 生活単元学習の授業実践、人とかかわる楽しさの中でスキルを教える取り組み

「ソーシャルスキルを学ぼう」～よく見よう～ 指導計画前・後期全20時間。絵や言葉で学んだり練習したりゲームの中でスキルを使ってみたりすることで、ソーシャルスキルを学んでいく。スキルの**教示→モデリング→リハーサル→フィードバック→一般化**

→授業の「見る修行」絵カードを使い、行動がスムーズになった。

③ 交流学級及び全校の中での場づくり

交流級ことわざブック発表会 感想を伝え合う中で友達と一緒に学ぶ楽しさを味わえた。運動会での組立体操 役割を交代することで相手を思う言葉かけができた。全校児童に向けての学習発表会 目標をもって取り組むことと達成したときの充足感、満足感を味わうことができた。

④ 家庭との連携

保護者に子どもが頑張っていること、得意なことを具体的に伝えた。個別教育相談や学校公開日、学習発表会など、機会がある毎に頑張っているところを伝えたことで、保護者にも笑顔がみられ、子どもも頑張ろうという気持ちになった。

(2) 今後の課題

- ① 興味関心のある活動を広げる工夫と新しい学習につなげる工夫、複数で学習する場合でも集中力が持続できるようにする。
- ② 時間配分とゲームの仕方の工夫、環境整備などにより、スキルをどんな場面でも応用できるようにしていく。
- ③ 交流級担任との連携を大切にして交流級で活躍できる場作りをする。全職員が特別支援学級の子も達を知り理解を深められるよう、特別支援学級の担任が発信していく。全職員で見守る環境作りをすることで自尊感情が高められる工夫をしていく。
- ④ 放課後の過ごし方について、家庭とともに関係機関や地域との連携も図っていく。

2 協議内容

- (1) 興味のあることを上手に教材化してあった。1時間の組立でもしっかりされていた。
- (2) 本人の得意な面を生かし学習に参加させている点（音読でアナウンスに見立てた実践など）がすばらしい。本児の特性を踏まえた工夫（パターン化）を周囲に認められる場に繋げる。
- (3) 特別支援学級での学習を交流級で生かせる場（活躍の場）を交流級担任との協力で設定する。役割を与えられることで達成感が得られる。通級指導教室、通常の学級、医療機関等との連携では、課題が一致するよう密な連携が大切である。
- (4) 子どものいいところをたくさん伝えることが、保護者の精神的な安定にもつながる。
- (5) 自尊感情を育てるためには、支援級でその子を伸ばし、その能力を発揮させていく環境作りや評価が重要である。できないことに否定的にならず自分を大切にすることも重要である。
- (6) 45分を一単位とせずその子の状況に合わせ、楽しい活動を多めにしたりして学習の流れを作る。その中でポイントとなる児童への指導に重点を置く。
- (7) ソーシャルスキルを状況によって取り入れる。（道徳、その他）見通しを持たせる時、負のイメージも先に持たせる。般化は難しいが、日常で生かされている部分を褒め、日常場面を通して学ばせる、場面場面を捉えた指導が大切である。
- (8) 文で表せない子には、4種類の顔カードから選んで理由を言うようにするとよい。

3 まとめ

- (1) ・個別の指導計画の作成と活用について、特別支援学校学習指導要領解説（総則編・自立活動編）で確認してほしい。評価については、過程を重視し他者との比較ではなく個々がどれだけ成長したかという視点が大切である。
 - ・子どもの抱える課題は多様化・複雑化している。特別支援学級の担任の知識・スキルプラン等を各校の通常の学級の担任に助言して行ってほしい。
- (2) ・提案は、自立活動の「他者とのかわりの基礎に関すること」「コミュニケーション手段の選択と活用に関すること」の主旨に合うよい実践であった。
 - ・「合理的配慮」とその基礎となる環境整備について
 - ・学習で身につけた力が将来どのような生活場面で生かされるのかを見通し、教育課程の編成をしていくことが重要である。